
まおうさま、ひとになる。

草臥れ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まおうさま、ひとになる。

【Nコード】

N0286U

【作者名】

草臥れ

【あらすじ】

本当の魔王とかではなくダンジョンの最奥で育った魔王のように強い子供が主人公の話。冒険者の男がランクに合わないダンジョンの階層でヤバいもう死ぬって所にお散歩レベルで弱い所（子供主観）に遊びに来てた子供に助けられる。と云うか子供興味津々。初めて自分と同じ形の生き物見たからね。そりゃあ興味もわくよね！弱いけど！なんか大きいのに弱いけど！見たいな感じの女の子。

予備動作なくスコーン！！と魔物の頭を吹っ飛ばしてキョトン顔の子供と五つ星の冒険者がごたいめーん！

興味津々でツンツンされたり怪我を治してくれたり。あ、有難うで
も言葉通じねえー！！な冒険者。とりあえず此処はヤバいから（
冒険者主観）帰ろう。でもこの子供どうしよう？

初：まおうさまの御生れ。

大きな町を襲った竜は町を壊滅に追い込んだ。

でも竜も瀕死の状態まで追い込まれていた。

このままじゃあ竜も死んでしまう。竜は理解していた。

くすみの無い、綺麗な魂を食べなければ……。

竜は自分の住みかである、ダンジョンに程近い町から産まれたての人間の赤ん坊を一人さらっていった。此処まで綺麗な魂ならば、一人で十分だ。

食べるまで殺さないように、瀕死の体に鞭を打って竜はねぐらへ帰って行った。

竜がダンジョンの最下層、自分が寝るために作った巣穴に戻ると、さらってきた赤ん坊が目を見ました。

こぼれそうな大きな目が、ギョロギョロと当たりを見回し、自分が危険な場所にいると本能的に悟った赤ん坊は腹の底から泣きだした。お腹が減った夜泣きとも、おしめを変えてほしいと訴える夜泣きとも違う。本能が叩きだす夜泣きだ。

赤ん坊の甲高い声は、聴覚が発達しきった竜には聞くに堪えない音だった。そもそも竜が普段対峙していたのは人間の男。それでもまだ竜にとっては高い声で、ギヤーギヤーと鬱陶しい耳触りな音だったのだが、赤ん坊の声は別格で痛い。

鼓膜を刺激し、脳が揺れ、それでも泣き続ける赤ん坊は本能と云うべきか、うつすらと魂を消費して泣き声に魔力まで宿して攻撃してきた。

それに耐えうる力なぞ竜にはもう残っておらず、竜は血を吐いて

倒れ込み、淡い光を発して赤ん坊に吸収されていった。

この、赤ん坊と竜が生きる世界では殺した生き物の力を吸収するのが普通であった。更に言えば初めて吸収する魂が自分と差がある方が、今後成長する余地が増えると言うのが一般的だ。この差がある、と云っても格下では意味が無い。

蟻も軍勢を構えてくれば恐怖の対象になりえようが、たかが一匹で人に勝てるはずもなし。そう言う点ではやはり格下の存在であった。要はこの先、自分の才能を伸ばせるかどうかは産まれて一番最初に何を殺したかで決まるのだ。

世にいる大抵の子供は蟻やバツタ、ミミズ等を殺してしまう。善悪の区別もついていない内に潰してしまったり、好奇心で飼ってみたがいつの間にか死んでしまったり。殆どの場合はそのうだと言える。

ごく稀に親が瀕死の狼や熊のトドメを刺すように仕向けたりして大成する子供を作ると言った、一種の英才教育を施したり、母親が病弱で産まれてすぐに親殺しをしてしまい悲劇の天才となってしまうものも居るが、そう言った者はごく少数であった。

そう、狼や熊、そしてもつと低い確率で母親など、それでさえごく少数なのだ。最弱と呼ばれるモンスターでも人生の初めに殺されると言う事はまず無い。野生動物は本能で勝てないと知り、どんなに弱らせても子供が勝てる確率は低く、逆に殺されてしまう可能性の方が高いからだ。

そんな中、数々の幸運と奇跡により、竜殺しの赤ん坊が生まれてしまった事は、まだ誰も知る事の無い事実であった。

例え竜を殺したような赤ん坊で、それ故に他の魔物が近寄ってくる事が無くなったとしても、食糧の確保も出来なければ餓死してしまう。

しかし赤ん坊が居る世界は、世界に認められるほど強くなると大
自然から発せられる気を吸収して何も食べずとも栄養をとる事が可
能であった。

普通はそこへ行きつくまでに辛い修業やら気が遠くなるような勉
強やらが必要であつたが、何千年と最強を護り続けた竜を取り込ん
でしまった赤ん坊には無用の長物であつた。

悲しむべきはそんな存在を取り込んでしまったが故に不死に近い
存在になってしまった事だろうが、赤ん坊がそれに気付くはずも無
く、今はただすやすやと安眠をむさぼるだけである。

そうして、赤ん坊は人を知らずにダンジョンの最下層でひっそり
と成長を遂げていった。

一：まおうさま、人に会う。

五つ星の冒険者として国を代表するまでになった男は、信じられない光景を目の当たりにしている。

男の名はジャンジャック・オールド・シークウェス。侯爵家の五男坊として産まれた彼は、貴族位としては国王、公爵に次ぐ三番目の家の者として騎士になるべく育てられた。

だが長男が家を継ぎ、次男三男四男と武官、文官として名を馳せて国に貢献したために末っ子のお前は自由に生きると選択肢を上から与えられた。ならばと家を飛び出し旅人として世界各地を回り、旅の最中、金を稼ぐために入った冒険者組合……通称ギルドの中で生きている人の中ではトップクラスの五つ星まで上り詰めた男だ。

歴史に名を残す六つ星以上の者は、本当に人を辞めたような者ばかりだったので実質最強クラスと云っても過言ではないだろう。

冒険者に限らず、傭兵、商人、吟遊詩人、執事やお針子に至るまで様々な組合が存在する。冒険者なら冒険者ギルド、商人なら商業ギルドと呼ばれる一種の斡旋所だ。そんなギルドは所属している者を星の数で階級別けする。入りたてが一つ星で、歴史上もっとも多くの星を獲得した者は八つ星だと言われている。六つ星以上の者はどの分野においても人間を辞めたと云わんばかりの者しか居ない。最高クラスの八つ星のお針子が伝説の糸を求めて針一本で二十年続く五十万対八十万の戦争に終止符を打ったのは有名な話だ。

だがそんな人外のバケモノのような人はもう歴史上の人物。今生きている者で最高ランクが五つ星で、ソレすらも世界に30人を下回る。

そんな中の一人であるジャンは、世界最大の謎と云われるダンジ

ヨンに日々潜る生活を続けていた。
他の塔のようにそびえ立つダンジョンに対し、洞窟のような入り口から入り地下に潜るタイプの物はジャンの故郷、テオラロール以外に存在しない。

ダンジョンから無限に生み出される魔物を狩って魂を吸収し、零れ落ちる光が静まってから落ちた光が固まった何かを拾い上げる。
光が落すのはランダムで、コインだったり銅や銀、金などの鉱石そのままだったり、明らかに人の手が入った武器防具装飾品であったり様々だ。人はこれを落し物と呼んでいる。
また、魂の吸収を拒否すれば魔物の肉体は留まり、そのまま食事に活用されたりする。どんな不思議が働いているのかはまだ解明されていないが、人はその様なサイクルで生活を続けていた。

そんな中、ジャンは己を鍛えるために自分より強い敵が居る階層まで潜り、ひたすら戦っては落し物を集めていた。

そして残りの水の量も危ういかと云う所で、下へ続く階段を見つけたのが運の尽き。

元々の魔力が少ないジャンは、帰還の巻物と云う一瞬で家に帰れるアイテムを常に持って居た。その帰還の巻物、通称スクロールがあるからと、覗くだけだと言いつつ階段を降りてしまったのだ。

そこはダンジョンの例にも漏れず、と云うべきか。一つ下の階は恐ろしい程強い敵がわんさか居た。

一つ上の階ですら、自分より強い魔物しか出なかったのだ。そんな中一つ下の階に潜るのは自殺行為としか言えない。

普段ならば犯さない失敗を嘆いて、スクロールを使おうにも敵がどんどん攻撃してくる。

敵は目に見える範囲で三体。五メートルを越そうかと云う強大な

熊に似たモンスターだ。コレで目に見えない、空気に溶け込むモンスターや火や水に擬態するモンスターが居たら目も当てられない。そう言ったモンスターは打撃攻撃が通用しないので、魔力の少ないジャンは道具に頼るほかないのだ。

そんな横道に逸れた事を考えたからか、熊の形をしたモンスター、ハングリーアーウベアはジャンにトドメと云わんばかりに襲いかかった。

かろうじて正面と右側のハングリーアーウベアを凌いだジャンだったが、左から襲いかかってくるモノまで対処しきれなかった。

「（あ、終わる……）」

縁起でもない事を思った瞬間、信じられない光景を目の当たりにした。体つきが細く、何故こんなところに居るのか解らない、多めに見て十歳。下手をすれば七、八歳程の幼い女の子が、素っ裸でハングリーアーウベアを蹴り飛ばしたからだ。

更に信じられない事に、蹴り飛ばされたハングリーアーウベアから淡い光が女の子に降り注がれている。絶命した証だ。

ジャンが呆然として居ると、女の子は不思議そうな顔をして親が子供を叱るようにするかの如く、ハングリーアーウベアに拳骨を振り落とした。

頭蓋骨が沈み倒れたソレからは、またしても光が女の子に降り注ぐ。最後の一匹もほったを叩くだけで壁にめり込み、光が溢れて女の子に注がれた。

ありえない。ジャンは目の前の現実を認めたく無かった。曲がりなりにも自分は五つ星で、恐らくこの階層に居るモンスターは六つ星以上。ヘタしたら七つ星レベルかもしれない。

そんなモンスターを防具、ましてや服すら来ていない女の子が倒せ

るなどと、夢物語にすらならないだろう。しかし組合……冒険者ギルドから支給されている記録用マジックアイテムであるメモリージュと呼ばれる珠には、女の子が倒しているシーンがはっきりと記録されている。

いまだ現実に戻って来ないジャンを不思議そうな顔で見つめている女の子は、自分の体とジャンを見比べて、面白そうにツンツンとつついたりペタペタと触ったりしている。

とりあえず人並みに常識があったジャンは、非常識な光景を拒絶しつつも自信の防具品であるマントを女の子に巻きつける事に成功した。

後に彼は、この時ほど自分の目とメモリージュを疑いたかった事は無いと酒場にいる仲間に語った。

二：まおうさま、意思疎通をはかる。

女の子は、目の前の大きな自分と同じ形をしている生き物が怪我をしている事に気がついた。

自分の怪我は、治すもの。自分以外は敵。でもコレは自分と同じ形をしている。もしかしたら自分もこんな顔なのかもしれない。

鏡を見た事の無い女の子は、そう思った。正確に言えば女の子は言葉と云う概念が無かったので、それに近い思いを抱いた。

目の前に居る、コレが何なのか、女の子には判断がつかなかった。何かを体に巻かれたけれど、それも拘束する類の物では無かったし、敵と対峙した時のピリピリする感覚も無い。

どうしよう……。困った女の子はとりあえず目の前の生き物の怪我を治しておこうと考えた。あんまり強くないみたいだし。襲ってきたら倒せば良いと思ったのだ。

「あー」

一言、単語にもなっていない声を上げた途端、ジャンの身体は優しい光に包まれかすり傷一つない健康体になった。それどころか今まで感じていた疲労感も無い。

異常だ。異常事態だ。だがそれを肯定してくれるのは誰ひとりこの場に居なかった。

「君は一体何者だ？」

若干警戒を含んだ声色で尋ねてみても、女の子はキョトンとするだけだ。

「大体なんでこんなところに子供が居る？ 親はどうした。それになんだあの力は！ 頼むから何か言ってくれ！！」

懇願するような声を孕んでも、女の子は不思議そうな顔をしている。表情筋をあまり使う機会が無かった女の子は、自分に出来る精いっぱいの困惑を顔に出したつもりだが生憎と傍から見たら無表情だ。不思議そうな目をしているな、と解るくらいであろう。

「うー」

またしても女の子は一言声を上げた。自分以外の人間を見た事のない女の子は当然、会話なぞしたことも無い。それどころか声を上げる必要すら無かった。何せダンジョンのヒエラルヒーの頂点はこの女の子だ。痛みでうめく。なんて経験も無いだろう。

故に女の子の語録は「あ」と「う」しか無い。喉をふるわせて出せる最低限の音だ。

逆にいえば、世の魔法使い達等が長つたらしく時間を掛けて使う魔法を女の子はこの二音だけで扱う事が出来るのである。

世界中の魔法使い達等が聞いたら絶叫しかねない事実である。

そんな世の常識を軽々と破壊してくれた女の子と、女の子の目の前にいる何かとされているジャンは女の子の発した魔法で心が繋がった。

レイラインと云う上位の魔法なのだが、女の子は知る由もない。ジャンはガラガラと音をたてて崩落していく常識を乾いた笑顔で見ている感覚に陥った。

敵？ 敵？ 怪我？ 治る。何？ 同じ？ 敵？

一拍して、自分の中に疑問がふつふつと湧き上がるのをジャンは感じとった。何事かと思ったが、レイラインを通じて送られてくる女の子の感情なのだと理解して、己も感情を送り返す。

ここで女の子に敵と認識されたら堪ったものではない。何せ自分が倒せなかったハングリーアーウベアを軽々と三体も倒したのは目の前にいる女の子だからだ。

同じ。味方。傷。無い。感謝。感謝。

ありがとうと感謝の念を述べ、最後に一つ付け加えた。

同じ。沢山。……来る？

明らかに情操教育の悪いこの場から連れ出した方が良さだろうと云う考えだが、産まれてこの方ダンジョン以外の場所を知らない女の子にとっては今更であろう。

しかし、女の子を縛るものは何もない。今までもこれからもそうであろう。だから女の子は自分の感情に素直に従った。

沢山。楽しい？ 行く！

三：まおうさま、お風呂に入る。

ジャンは女の子を抱き上げて、スクロールに魔力を注いだ。

途端、二人の周りに巻物が無造作にまわり、青白い光でドームを作り始めた。

帰還の巻物とは、ダンジョンやフィールドの低級モンスターが低確率で残して行く落し物である。他に王都やそれに準ずる大きな街だと、アーティファクトレプリカギルドに所属する魔術師が作っている事もあるし、魔法使いや魔導師ならば同じ効果の魔法を使う事が出来る。

魔力が少ない者が手軽に扱う事の出来る道具だ。

効果は自分が一番慣れ親しんだ場所に強制送還する事が出来ると言っただけである。

指定した場所に行きたいのであれば空白の移動の巻物を使わなければならぬ。空白の部分に行きたい地名、もしくは思い浮かべた場所の特徴を書き込んで魔力を注げば良い。他はたいてい同じである。

巻物系はほかに攻撃の巻物や補助の巻物等があるが、一般人に出回る率が高いのと認知度が一番高いと言う理由で帰還の巻物をスクロールと呼んでいる。

他の巻物を云う場合、火の攻撃をする巻物であれば火のスクロール等、頭に特徴を持つてくるのが普通だ。

スクロールを使って出た先は、ジャンの実家であった。すなわちシークウェス家である。

普通貴族が冒険者をしている場合、家族との摩擦があって飛びだしたりするのが殆どだが、ジャンは好きにしているよと放り出された

身であるのでその様な事は無い。家族仲はいたって良好だ。

ジャンにとっては久々の景色であったが、女の子にとっては初めての光景だ。しかし女の子は「あ！」と短く叫んだ後に、頭部分を闇で覆った。

初めて見る太陽は刺激が強すぎたのだ。

驚きと未知で占められた心は即座にジャンに伝わった。此処まで来るとジャンも女の子がダンジョンで育ち、外に出た事が無い事に気がついた。

髪先は焼け縮れ、恐らく邪魔だったから焼いて切ったのであろう。異臭こそしないが綺麗とは言い難い肌。しかし日に焼けた事の無い肌は恐ろしく白かった。

身体を洗った事が無いはずの女の子だが、生き物としてのレベルが高く世界が栄養を補ってくれている、それと同時に身体に不必要な物の排除も行ってくれているので、病気や汚れとは無縁だ。しかしそんな事ジャンは知らないのです、首をかしげつつ女の子のマントを頭にかぶせるように巻きなおした。

「ジャンジャック様、おかえりなさいませ」

丁度庭先にメイドが出ていたので、ジャンはこれ幸いとメイドを呼びとめた。

「丁度良い、身元不明の女の子を拾ったんだ。父とジル兄上と爺を談話室に呼んでおいてくれないか」

身元不明と云う言葉を若干強調しつつ、ジャンは指示を出した。とりあえず変態の称号は免れたい。

初めにあつたメイドにそう言い付け、玄関をくぐり、とりあえず風呂場へ急いだ。

他のメイドや執事に頼もうとも思ったのだが、如何せんこの少女は自分より遙かに力が強い。下手したら悪意の欠片も無くスプラッタ、なんて事になりえないとも限らない。

なるべく害意が無い事を伝えつつ、女の子を風呂に入れた。なにせ体を洗うと言う行為すら知らない子供だ。警戒が強くて気苦労も多い。

害が無い事は伝わったのか、次第に泡や布に興味を示しだした。伝わってくる感情は疑問符だらけ。

何？ が一番多く、何故自分が疑問に思うのかまで疑問符を浮かべる始末。

だがしかし、外に対する適応も早く、もう日の光を浴びてもなんとも思わないようだ。証拠に風呂場から窓の外に興味津々で行った様子で見つめ続けている。

あらかた体を洗い終えたところで全体的にすぎ、メイドを呼び付けた。女の子の服をどうするか相談だ。

「今まで服を着た事が無い見たいだ。何かいい案はあるか？」

「でしたら、動きやすい服がよろしゅうございますね。白のワンピースをお持ちいたします」

服を着た事が無いと言った後にメイドは不思議そうな顔をしたが、特に尋ねる事も無く仕事を完遂した。

下着のゴムが鬱陶しいような行動に出たが、女の子はとりあえず服を着る事は周りのみんなとお揃いと認識してたのしんだ。

四：まおうさま、認識される。

服を着た女の子は、ジャンと手をつないで屋敷を歩いた。最初は抱っこされそうになったのだが「うー」と唸って拒絶したのだ。視線が高くて不気味だったらしい。

そうこうしながら談話室に入った。家族と云う事でノックなどの作法は全部略式だ。

「父上、ジル兄上、爺。集まってくれてありがとうございます」

ジャンはそう言うと言の前の三人に笑顔を向けてから、女の子を抱き上げてソファに座らせた。その後隣に自分も座る。

「身元不明の女兒を拾ったと聞いたが、どう云う事だ」

ジャンに比べて若干鋭い目つきの真ん中の男性が、威圧的な口調でそう聞いた。

「ジル兄上、説明も必要ですがその前に、このメモリージュを見て頂きたいのです」

そう言っでジャンはほんのりと橙色に光る珠を取り出し微量の魔力を注ぎこんだ。

メモリージュは冒険者がどの程度戦えるかを監視録する為の魔法が込められた珠であり、プライバシーの侵害にならないよう戦闘描写しか記録されないと言うギルドから支給されるマジックアイテムである。

そうして映し出される光景は、いつもと何ら変わらないジャンの戦闘描写だ。

「コレがなんだと言うんだ」

ジル兄上と呼ばれた男、ジュリオルス・オット・シークウェスは些か不機嫌な顔でジャンに聞いた。

不機嫌なのは昨日遊び呆けていたから書類が溜まって悲惨な事になっていると言う、自業自得を地で行っているだけなのだが、ジャンが何故ここまで不機嫌なのか知る由も無く、何か粗相でもしたか？と若干不安に襲われていた。

「いや、ここら辺は飛ばしても構わないんです。問題は此处からです」

そう言っただけでジャンは自分が下の階に下りる前の最後の戦闘を見せた。

「この後、俺は迂闊にも下の階に下りてしまいました。そこで大凡七つ星レベルと思われるハングリーアーウベア三体と出くわしたのです。コレがその時の映像になります」

そう言っただけで映し出された戦闘は、集団リンチのような一方的な暴力だ。流石に家族がそんな状態になっている映像を見せられると顔色が悪くなる。

「此処までは、まあ。馬鹿な冒険者としてはありふれた事なのですから……」

そう言っただけで続きを見せる。一方的な集団暴力から一転。惨殺と云ってもいいような更に一方的な殺戮が一瞬にして起きた。更に言うならばその殺戮現場を作ったのは今家族の横に座ってソフ

アを面白そうに撫でたり縫い目を追ったりしている女の子だ。

その事実気付いて、三人は悪夢か何かかと額に手を当てたり米神をもんでみたり目頭を押してみたりと大忙しだ。

「出会った時に丸裸であつたり地上に上がった時に空に驚き光を拒んだり。その前にも見たことも聞いたことも無い魔法で俺の傷を完治させてくれたりと、常識が全く通用しません。推測になりますか恐らくこの子はダンジョンの奥で育つたのではないでしょうが」

ジャンがそう言うのと今度は左側の男性が声を上げた。

「すると何か？ その少女はお前でさえ勝てぬ魔物がうろつろするダンジョンで生活していたと言う事か？」

「想像に難くありません父上。俺見るなり不思議そうな目をしてツンツンぺたぺたと触ったりしていましたから、恐らく俺が初めて会った人なのでしょう。言葉も理解している様子はありませんでした」

ちなみに意思らしい思考回路もないので感情をそのままレイラインで繋げています。と言葉を続けた。

「ジャン坊ちやまにレイラインを繋げ続ける程魔力があるようには思えませんが……もしま」

「たぶん正解だよ爺。レイラインはこの子が自主的に繋げてくれたんだ。ちなみに詠唱は『うー』の一言だったよ」

その言葉に三人は絶句した。レイライン、と云うか心を扱う魔法は難しく、長つたらしい詠唱唱えるのが普通だからだ。

その様子にすぐ良く解ると同意したいジャンはうんうんと頷きながら女の子の頭を撫でた。

頭を撫でられた女の子は不思議そうな目をして無表情にジャンを見上げた。見上げられた事に気付いたジャンは、撫でる手をそのままに女の子の顔を改めて認識した。

撫でられている黒々とした長い髪は、毛先に行くにつれ縮れてお世辞にも綺麗とは言い難い。しかし髪を切れば見栄えもしよう、根元の方は絹糸のようにツヤツヤとしている。

世界の加護のおかげと云うべきか、身体に垢らしい汚れは無かったものの、土埃や敵の血などで汚れていた肌も今は陶磁器人形のようにただ白く美しいまでに復活していた。

前髪等と云う概念が無かったため、髪の毛こそ鬱陶しく伸び放題であるが、幼く見て七歳、多めに見積もって十歳程の女の子は傍目から見てもあと数年もすれば絶世の美女と歌われるであろう酷く愛らしい顔立ちだった。

愛らしい顔立ちなのに『酷く』とつくのは、その手の趣向家に狙われやすい、ある意味欠点になりうる顔立ちだからだ。

そこまで考えて、ジャンは目の前の放心している三人に言葉を掛けた。

「見た目、八歳か九歳か。そのくらいだと思うけど念のため六年前から十一年前までに居なくなつた赤子又は物心つく前の幼子を探してみようと思つてます。親が居るなら一言入れた方がいいでしょうから」

ダンジョンで暮らしていたとなれば普通の子供のように成長したとはとても思えない。しかしジャンはこの女の子が世界の加護を受けているだろうと云う予想はついていた。何があつたかは知らないが、普通の子供があのような力をふるう事も、ましてや人を見た事が無いと言つ言動をとるレベルで記憶が無い幼子が一人で生き抜く

事も不可能だと理解しているからだ。

その点、この世界は実によく出来ていた。

一度鍛えたら生涯落ちる事の無い筋肉。魂の栄養と云うべきマナを大気、自然から取り入れれば霞どころか飲まず食わずで過ごせる世界。

筋肉にしても魔力にしても衰える事は無く、圧倒的な力の差で有れば刃物や魔法で切りつけても掠り傷だけで終わってしまう。

もっとも処刑用のギロチンや表に出てこない薄ら暗い魔法や魔術など、その場限りではないが。

それが適応する世界だからこそ、この女の子が特筆すべき何かの一つでもあれば、どのような状態で育とうと、たった独りで生きると言うのに不思議は無いのだ。

「それは良い事だ。構わん。だが目の前の子供は常識を遺脱している。その力は確かに見た。その子の力は嘘偽り無いものだろう。それ故に危険。この事は中枢機関に報告せねばならぬ」

そう、世界に認められれば何ら不思議はない現象。それは先程メモリージュで実力を確認した三人も理解していた。

だが、世界に認められる程力を持つのに人生の殆どを費やして、それでも僅か一掬いの者だけが至れる至高の頂き。

大器晩成型の者が長寿を全うする直前に開花するような、そんな低確率でしか現れない存在なのだ。それでもこの世界は一度つけた力は衰えない。故に長寿を全うするまでのほんの数年だけ、頂きに辿り着いた者は世界を制する事が出来る。そこまで行けば人も魔物もどれだけ集まろうと殆どの者が初めて殺してしまう生き物のように潰せてしまうのだから。

そう、そんな最初に蟻やバツタ等を殺してしまった者には決して辿りつけない場所に、目の前の女の子は居るのだ。

「構いません。寧ろ王にまで報告が届く方が良い。この子にとって私たちは同じ形をしているだけの生き物でしか無いでしょう。それこそ敵意を一瞬でも見せればハングリーアーウベアの二の舞です」

レイラインを繋いでいるからこそ解る事実をそつと伝えたと、三人は更に顔を青くした。

「先代である父上や今代当主の兄上に指示を出すのは申し訳ありませんが、必ずや国王にまで報告を届けて下さい。爺は俺と一緒にこの子の両親を探してほしい」

騎士には出来ない。冒険者や傭兵など、自分を主とする職業にだけ許された星の指示を示す。ランクが高い、五つ星の冒険者は国にとられる事は無い。どこの国でも優遇される存在だからだ。その権力を使い、他の者であれば不敬に取られる行為を行う。

「先代当主、アールデリツヒ・ル・オット・シークUESのままだに指示に従おう」

「今代当主ジュリオルス・オット・シークUES。事の事態、理解した」

「先代当主専属執事ウィルスミス・ル・ワール・オディロット。坊ちやまのご意向のままに」

そして仲の良い家族達は、なんの不満も抱かないままジャンの言葉に沿う行動に移し出る。

五：まおうさま、召喚する。

ジャンをはじめとするシークウェス家の者が情報のやり取りで働いている間、女の子は長女であるリアシユタイン・ミ・シークウェスに預けられた。五男三女の兄妹の上から二人目であるリシユーは、子守りには慣れたものであった。

本来ならばあやと呼ばれるメイド長に預けるはずだったが、神々からの贈り物と云う意味を持つ『オラクル』を授かっているリシユーが適役だと判断されたのだ。

オラクルとは神々が贈り物と称する神託である。実際に神が居る訳では無く、精霊や神話の意志などの肉体を持たない生命体を総称して神と呼んでいる。その神達が世界に掛けあつてプレゼントする才能の事だ。

贈り物と云うだけあつて受け取り拒否も可能である。と云うより、オラクルを確認したのちに誓約をたてないとオラクルを発動する事が出来ないのだ。

またオラクルは神が世界にお願いして受託されないと贈れないため、授かっている者がかなり少ない。

ある意味、神の最高位からのオラクルが女の子の持つ力と云つても間違いではないだろう。

「リツア、何がしたいかしら？ とりあえず言葉のお勉強を始めなきや。でも遊びながらで良いわよね」

リツアとは小さな女の子と云う意味であり、女の子の名前では無い。当初名前を付けようかと云う話になったが、女の子の両親が見つけた時に混乱するかもしれないと言う理由で先送りされた。

それ故に皆がリツアと呼んでいるが、それを女の子が自分の名前と認識してしまわないかが問題だ。

「あー」

女の子の目の前に子供が興味を示そうな物をたくさん並べて、好きなものを選ばせてみた。

と、女の子はそこから青いクレヨンを手にとった。

「リツアはお絵描きが好きなのかしら？　じゃ、一緒にお絵描きしましょうか」

そう言っただけでリシユーはメイドを呼び、画用紙とクレヨンや色鉛筆を用意させた。

「ふふっ、こうやって使うのよ？」

そう言っただけで女の子を膝の上に乗せ、リシユーは机の上にある画用紙に絵を描き始めた。リシユーが躊躇なく女の子と話せるのはひとえにオラクルのおかげである。リシユーが授かっているオラクルは『危険回避』の一つのみ。一定時間、三回までどんな危険も回避してくれると言った代物だ。

「あーうー」

リシユーのお手本を見て、女の子は上機嫌で画用紙にお絵描きし始めた。

三歳程度の子が描くような、ミミズがのた打ち回った様な線で何やら怪しげな物体が画用紙に描かれていく。

「あー」

そして上機嫌に描き終わった頃、リシユーの頭の中にカーンと鐘が響くような音が聞こえた。

……オラクルが発動した証だ。

何が起こったのか全く分からないリシユーは、急いで家一番の強者、ジャンを呼ぶために貴重なマジックアイテムである『強制召喚のスクロール』を行使した。

強制召喚のスクロールで強制的に駆けつけたジャンは何が起きているのかイマイチ判断がつかなかった。

と云うのも、女の子は上機嫌だし敵と言う敵も居ない。しかし姉であるリシユーは困惑した態度で女の子と若干距離をとっている。

「リシユー姉上、どうしましたか？」

良く解らない状況に音を上げたジャンはとりあえずリシユーに話を聞いてみる事にした。

「それが、良く解らないのだけどオラクルが発動したのよ。リツアはずっと上機嫌だし他に人が入ってくると言う事も無かったのに……」

そう言われるとおかしな話だ。とりあえずジャンは女の子に近寄った。女の子にとって魔力の放出……魔法を使い続ける事は息をすることと同じく当たり前の事らしく、ジャンと女の子はレイラインで繋がったままだった。

仲間、姉、危険？ 何？ 何？

とりあえず解りやすい単語を選んで女の子にぶつけてみる。レイラインの楽なところは感情同士のぶつけ合いの為、ある意味自動翻訳される所にある。

しかし女の子のように表裏無い人だから出来る事であり、腹に一物抱えている者にとつては最悪な魔法だ。ジャンが物凄く誠実な人間であつたと周りに認識された要因にもなつた。

危険、無い。何？

それに対し女の子は不思議そうな目をしてジャンを見つめた。とりあえず女の子に敵意がある様子は無いし、機嫌を損ねたと言う事も無いらしい。

と云う事は別の何かがオラクルに反応したと言う事になる。ジャンは貴重なマジックアイテムを惜しげも無く使つて部屋中の違和感を調べた。

トーン……トーン……トーン……

日常にあるには不自然な物に対して音で知らせる使い捨ての魔法の探知機、オルフェーンが机の上に向かつて反応しだした。見た目はただの四角い箱だが、不自然な物や危険な物に対しての発見力が非常に優れた一級品だ。

目の前にあるのはクレヨン、色鉛筆、パステル、飲み水の入ったコップに、先程女の子が描いたばかりの『絵』

ミミズがのたくつたような線で描かれた何か。恐らく女の子にとつて印象深いダンジョンの生き物だろうが、この絵からは何かまで判別がつかない。しかし明らかにこの絵に対してオルフェーンは反応している。

「うー」

オルフェーンの音が面白かったのか、女の子は更に上機嫌な声を上げた。今まで表情筋を使って居なかったであろう為か頬が上がる事は無かったが、子供の表情に当てはめると笑顔になるんだろいうなあと云う想像がつく声だ。

その瞬間、女の子が描いた絵が宙に浮かび絵が飛び出て来たような光の線が現れた。どうやら女の子が絵に対して魔力を送ったようだ。

そして光が落ちつくと同時に出来たのは、エンペラーホッグ。天災ともいわれる八つ星クラスのモンスターだった。

それを見て嬉しげな声を上げるのは、やはり女の子だけだった。

この世界には紋章入れと云う職業がある。魔力を浸透させた鉄筆や木炭などで各々に見合った紋章を武器や防具に描き入れる職だ。紋章を入れることによるメリットは、武器防具の性能が格段に上がるのが最たるものだろう。紋章が正しく描き入れられれば例え藁半紙のような脆い紙でも銃弾を弾く事が出来るのだ。

しかし紋章が入った武器防具は簡単に装備が出来なくなる。紋章が自身を装備する者を選ぶようになるのだ。己の名前や象徴を描き入れればその人物しか装備出来ないようにする事だとして出来る。その為身の丈にあった物しか装備出来ず、例えば国王であろうと肉体を鍛えていなければ自分より高位の紋章が描かれた服などは着る事が出来ないのだ。

さてそこで女の子を見てみると、ダンジョンの最奥と云う危険な場所で育ったためか、良く見ると常に魔力を体に纏わせている。専門の職業が出来る程に純粋な魔力を身の内から外に出すのは難しく、それ故紋章入れと云う職は成り手が少ない。それに纏わせている量も微量だったので今まで出会った人は女の子が魔力を纏わせて

いる事に気がつかなかったのだ。

よくよく考えてみるとレイラインをほぼ丸一日使えばなしでも平気な程なので出来ないと思いいむのが間違いはあるのだが、そんな非人間的な人はそうそう居ないので気がつかなかったのも仕方が無いと言える。

そうこうしているうちに女の子は無表情で、レイラインで伝わってくる感情を表すと若干誇らしげに先程描いた、そして大惨事一歩手前の原因である画用紙を手にとってジャンに見せて来た。

どうやらエンペラーホッグを描いたらしい。そうか、それでか。とジャンは遠い目をしつつ女の子にアレは危険だと感情で訴えた。

「うー……あつ！」

褒めてもらえなかったのが不満だったのか、望んでいたリアクシヨンと違ったのか。真意の程は解らないが不満げな声を上げた後に女の子は一音でエンペラーホッグを消しさった。

「……自分以外の物に対する強制転移って、上級魔法なんだけどなあ……」

更に言えば天災と云われるエンペラーホッグは魔法解除に強いモンスターである。並大抵の魔法は効果が無く、小さな躯体から天候を操り人を噛み砕く恐ろしいモンスター、のはずであった。

「とりあえず無事で何よりです姉上。リツアには今後普通のお絵描きを教えて下さいますよう……」

隣で啞然としているリシューに向かってジャンは一呼吸おいてそう伝えた。

六：リシューとライハイマー。

エンペラーホッグの召喚のせいでオラクルを一時的に失ったりリシューは一週間ほど女の子に会う事は許されなかった。

目の前に天災なんぞが居たら三回の回避は出来ても確実に四回目がやってくる。生き残る方がおかしい。

そんな事があったものの女の子は素直にエンペラーホッグを消しさってくれたし、今のところコミュニケーションも不足は無い。

レイラインで繋がっているのはジャンだけであるが、女の子は人の表情を見るのが得意なようで、「あー」と「うー」だけで今のところ会話が成立している。

どうやら記憶力と頭の回転も悪くないようで、喋ろうとはしないものの此方が何を云っているのか、徐々に理解して行っているようだ。

それもこれも最初に殺した竜を吸収したが為に人間よりも大きな頭脳を持っているに等しい。解りやすく言えばスーパーコンピュータと脳を直接繋いで生きているようなものだからなせる業であるが、それを知る者は此处には居ない。

その理解力を見出したリシューはオラクルが回復するまで会えない間、庶民に普及している藁半紙を纏めて単語帳や簡単な日常会話、歌の歌詞などを大きく解りやすいように書いていった。

それから自分達も昔読んでいた絵本を取り出し、持ち運びしやすいように先程の藁半紙と共に軽量バックに入れる。

普通の旅人は旅をする為に傭兵団に入ったり総合組合から冒険者ギルドへ流れたりする。その時に安い小袋を買ったり貰ったりして旅の道具を持ち運ぶ。

この袋には縮小拡大の魔法が籠められており、入れる時は小さく、取り出す時は元の大きさに戻ると言う、持ち運びに大変便利なマジックアイテムだ。

稀に部屋の片づけが出来ない者が大量に所持している場合がある。幾ら小さくなると云っても限度があるからだ。

当然袋より大きなバックにその魔法が籠められて居れば入る量も増える。だがその分魔法も複雑になるので高額になるのだが、侯爵家に属する者ともなると家族全員が二個ずつ持つくらいには予備がある。

「とりあえず、このくらいかしら？」

リシユーはそう言つて旅支度でも終えたかのようにバックを置き、一息ついた。椅子に座ると同時に側仕えとして開いたドアの近くに立つて居たメイドがお茶の準備をする。

「ねえライハイマー、近いうちに吟遊詩人を呼びたいの。リツアにお歌と物語を教えるためよ」

不意にライハイマーと呼ばれたメイドは淀み無い動作でお茶を入れたつつリシユーに顔を向けた。

「了解しましたお嬢さま。リツアに対して危険回避出来そうな吟遊詩人をリストアップしておきます」

ゴールドンルールに則つたお茶をリシユーに出して、リシユーが望む答えを示す。ライハイマーはリシユーの為に王城にまで赴き経験を積んだ、対外的にはどこに出しても恥ずかしく無いメイドだ。少なくとも、リシユーを筆頭にシークウェス家ではその様な扱いになっている。

事実、王宮筆頭女官などは涙してライハイマーをシークウエス家に戻した位だから、ライハイマーの腕の良さは推して知るべし。

「お願いね。明日の午後までにはオラクルも復活すると思うから、午後になったら離れに向かうわ」

「イエス、マイレディ」

まるで王に向かうかのように恭しく頭を下げて、ライハイマーはお茶のお代わりを入れた。

七：まおうさまと同族。

リシューが居なかった間、女の子は一人で退屈だった。

暇故に遊んでもらおうにも此処にいる人間は脆い。ダンジョンの最奥で育った女の子にとって比較対象は己か周りにいた魔物だ。竜殺しやら八つ星モンスターと比べられたら誰だって脆いに決まっている。

食事の必要のない女の子としては何故食べる必要があるのか解らないが、ご飯を出してくれるし、襲ってくる者も居ない。ジャンからのレイラインで殺しは無しが好ましい事を学んでいた。

なぜ駄目なのかはイマイチ理解できなかったが、女の子の中でジャンは『良いヤツ』なのだ。ダンジョンにいた時に周りの魔物にも時々居た、無条件に襲ってこないイキモノ。それは女の子の中では総じて『良いヤツ』に分類される。

大ざっぱと云う事無かれ。魔物も人も亜人も精霊も関係ない所で育った女の子にとってはコレで十分だ。そもそも襲ってこないヤツなんか片手で数えられる程しか居ない。

そんなジャンから殺しも駄目だと感じとった女の子は、自己防衛のための遊び……狩りをしなくても良い状況と云うのは酷く暇な時間とかしていた。面白そうだったお絵描きも結局取り上げられてしまったし、特にする事も無い。

しかし子供とは反復することで物事を覚えていく生き物である。

そんな訳で例にも漏れず、女の子はここ数日にあった出来ごとを思い返してみた。

- ・泡でざぶざぶされた。
- ・同じ形のでかいのが良く解らない音を吐いていた。
- ・面白い棒で強かった魔物を描いてみた。
- ・描いてみたらそいつが出て来た。同じ形のデカイのの一つが還せと言ったので還した。

此処まで思い返してみても女の子はもうちょっと深く考えてみた。そう言えば同じ形の更に似た一つが変な棒を広げたら同じ形のデカイのが出て来たなあとか、同じ形のデカイのが四角いのにくねぐねを入れたら魔物の絵に向かって音が出たなあとか。

勿論女の子にこんな明確な単語は使えないのだが、とりあえず思い返すだけ思い返してみた。

幸い、女の子が無意識無自覚に危険過ぎるのでこの部屋に人はいない。それが暇に拍車を掛けているのだが、うっかりまたエンペラーホッグのようなモノが召喚されたら次こそ屋敷どころか国が滅ぶ。

そんな訳で細心の注意を払われて若干軟禁されている女の子は意気揚々と『ぐねぐね』と自身の魔力を練って行った。

「あー」

相変わらずの詠唱を終えてみると、部屋にある家具が一揃い増えている。

テーブルもソファーもキャビネットもポールハンガーもだ。部屋の中がせまくなってしまったが、作ったテーブル等を重さなど感じない動きで一所にまとめて更に魔力で遊ぶ。

「あーうーあー」

次に今までより少し長い詠唱と少し多い魔力を消費して作ったの

は、成人男性の拳一つもありそんな大きな鉱石の原石だ。
過去に女の子を見て「綺麗だなあ」と思った一品である。物凄く透
明度の高いアイオライトと呼ばれる石だ。

本来、材料無しの魔力だけで何かを作るのは不可能で、水の魔法
は空気中等の水分、風はそのまま空気の移動、火は空気中の埃等を
無理やり摩擦熱で発火させる等の元を作ってそこに魔力を通して量
を増やすのが魔法、魔術と呼ばれる現象だ。

故に女の子が行った行為は全く新しい何かなのだが、此処に人はお
らず誰もそれを知らないままポコポコと宝石や家具を量産していっ
た。

女の子が部屋で見た事のあるものを量産していたら、ペット用扉
から中型犬が入ってきた。シークウェス家の番犬見習いだ。
しかし普通の犬とは若干違い、額に二本の角が生えている。

この世界には、『秩序ある地』と『無秩序の地』の二種類がある。
秩序ある地は人間や動物が暮らし、無秩序の地は魔物などの人が恐
れるものが生態系を作っている。

力の強い上位の魔物などは秩序ある地に来る事が出来るが、そうそ
うある事では無い。

基本的に無秩序の地の方が土地が豊かで実りが豊富なので人が入る
事は多いが、力に覚えがある者しか入る事は無い。そうやって住み
分けがある程度出来ているから弱い生き物も生き残れる。

そんな秩序ある地に行き成り無秩序の地が湧く事がある。それが
ダンジョンだ。

ダンジョンがどのような経緯で発生するのはまだわかっていない
が、人の街に塔のダンジョンが出来た時に一つ、解った事がある。
野良猫が塔のダンジョンの敷地内で子を産んだら、猫型のモンスター

ーが産まれたのだ。それを見た冒険者が学士組合に急いで報告して調べたところ、驚きの事実が判明した。

基本的に動物と魔物は同じ生き物で、産まれた土地に秩序があるか無いかで見た目が変わるのだ。そして生後数週間、どちらの土地で成長するかで凶暴性の度合いが変わる。

ようは筋力重視で知性が無いのが魔物、知力の変わりに自己防衛の力を弱めたのが動物だ。

さて女の子の目の前にやって来た角が生えた中型犬。勿論普通の犬では無い。

人が人為的にダンジョンの中で産ませて、産まれてすぐに街の中で訓練しながら育てた半魔物だ。普通の犬より凶暴性があるが、野生の犬型モンスターのように知性が無い訳ではなくある程度の云う事はきく。中型犬サイズなのでそこまで力はないが、一応モンスターなので一般人よりは圧倒的に強い。云わば訓練された魔物である。

そんな中型犬を見て、女の子は精いっぱい疑問を顔に出した表情をした。傍から見たら無表情で若干首をかしげている状態だ。

「うー？」

女の子の中では不思議が渦を巻いていた。魔物の気配だ。それは間違いない。だって育った場所はこの気配で包まれていたのだから女の子としては同族に近い。

しかし暴れていない。こんな生き物は初めてだ。女の子にとってジャンヤリシューは同じ形の者、では人為的に産まれたこの魔物ならどうだろうか。

女の子が産まれた所は秩序ある地、育った場所は無秩序の地。そ

れに反してこの番犬見習いが産まれたのは無秩序の地、育った場所は秩序ある地。

全く正反対だが、それにより波長があつた。お互いに足りない部分を補おうとしたのか、ほぼ同時にリンクの魔法を使った。

無秩序の地は弱きものにとっては棺桶にしかない。一人で生きていけるまでは親が守るが、巣立ちをしたら弱い者はすぐに死んでいく。なればこそ、無秩序の地で生きるイキモノの総てが最初に覚える魔法がある。それがリンク、知識共有の魔法だ。

こうしてシークウエス家の居候と番犬は、誰にも知られる事無く生きる力を増やして行った。

八：まおうさま、当主と話す。

女の子が番犬見習いから動物視点の人間生活の基盤となる知識を手に入れた後、元々あったソファと自らの魔力で作ったソファを繋げてごろごろしていたらドアを叩く音がした。

「ジュリオルスだ。入るぞ」

先の番犬見習いとのリンクで「待て」や「攻撃」「伏せ」などの言葉の意味を知った女の子だったが、日常会話は未だに未知の分野だ。

そんな人間としての言葉を覚えていない女の子には不要の挨拶だったが、屋敷にいる人間は必ず女の子に一声かけると言う規則が出来た。

一日でも早く言葉を覚えてもらおうと言う大人達の判断の為、家の人間ではないにもかかわらずメイドやフットマンは必ず女の子に頭を下げて挨拶をする。

女の子から返事は来る筈も無いので、ジュリオは堂々と部屋に入り、絶句した。

家具が一式、ヘタしたら三つくらい増えているのである。此処にある家具は女の子が誤って壊しても大丈夫なように、価値の低い物を揃えた。しかしそれは貴族からの視点であり、十分な貯蓄が出来る程度の平民の家にある家具よりは高い物だ。

それに時代遅れな家具と云ってもいい。今は透かしの彫られた家具が人気だが、女の子に与えられた物は二世代くらい前の直線の木材に模様が彫られた割とガッチリした家具だ。

そういった点では買い取屋に持っていくと安くなるだろうが、それでも地方の農村などの家では買えないような、職人が丹精込めて作

った家具だ。

それが、増えている。

それもセットで作ったんですよとは云えぬ、小さな傷まで再現されたそっくりな家具がだ。

しかも床を見てみると部屋には無かったアイオライトの原石がごろごろと転がっている。大きさも質も十分で、ひとつでも売ればコレだけで四大家族が切り詰めれば二カ月はもつだろう。

妹のリシューや末子のジャンがこの女の子の事になると常識は通用しないと散々言っていたが、まさにその通り。ジュリオは真面目に働いているのが馬鹿らしくなる瞬間を目の当たりにした。

しかしそんな事を思っても話は進まない。元々話をしに来たのに未だ扉を開けて突っ立っているだけだ。

我に返ったジュリオは部屋の状況を意図的に頭から切り離して女の子に向かい意思疎通のスクロールを開いた。

そのスクロールには解りやすく一言、「母親発見」と書かれていた。

親捜しはジャンとオディロット爺の仕事だったのだが、国王に取り次いだ時に冒険者としての肩書と保護した張本人であるジャンジヤックを呼べとの通達があったので、ジャンは父と一緒に都城している。

その為に意思疎通の難しい女の子の所に来たジュリオは、くっつけられたソファでごろごろしながらキョトンとしている女の子を見て小さくため息をこぼした。

意思疎通のスクロールは本来、言語の違う人々が使うための道具であり、決して言葉を知らない子供に使う物では無い。

しかし単語に思いを乗せて書き込めば、ある程度の子供には通じる事が判明して以来、紋章入れ職人が時たま子供用に描き入れる事があった。

今回も同じような手段で女の子に母親が見つかったと言うのをなんとか伝える事が出来た次第である。

本当はレイラインが繋がっているジャンが伝えるのが一番早いのだが、ジャンは国家中枢に父と出向いているためにジュリオが女の子の所に来たのだ。

女の子にとってシークウエス家にいる人間は『良いヤツ』であるジャンの付属品みたいな者で、大まかに別けると『なよっちいけど何か良いヤツ等』で一括りにされてしまう存在である。

そんな一括りにされてしまう存在の当主は、妹のリシューのようなオラクルは持つて居ないので危険時に即離脱出来る腕輪を付けてやって来た。相変わらず女の子は八つ星クラスのモンスターと扱いが一緒である。

そんな危険を冒しつつも、ジュリオは女の子に母親の概念を教えた。

時々魔法での波で相槌を打っているの、とりあえず産みの親が居ると言う事は理解したようだ。それに対しジュリオはホッと一息ついた。

「とりあえず、お前の母親は爺が今引き抜きをしている。娼婦らしいからな。未だ現役とは恐れ入るが、客としては呼べん。伝わらないだろうが伝えたからな」

そう言ってジュリオは明日にでも来る予定のリシューに向けて母親の情報を含めた置き手紙を二個に増やしてしまった机の端に置いた。

手紙には美しい文字で『リアシュタインに向けて』と書かれている。その横にもう一枚、割と乱雑な文字で『ライハイマー宛』と書かれた封筒を無造作に置いた。

そして最後に机の上に置いた物を触らないように、と云う説明が籠められた意思疎通のスクロールを女の子に使い、改めて一息ついたジュリオは女の子の頭をポンポンと撫でてから部屋を後にした。

九：まおうさまの母親。

娼館に勤めている男は、齢七十当たりのジジイが来た時に首を上げていた。

ここは自国や他国の大貴族等を持て成すために作られた、国一番の春売り場だ。最も堂々と娼館と謳い文句を掲げると客の方が困るため、女芸屋敷とされている。

その中でも指名度が高い順番の三人は娼姫と云われ、終りに爵位の冠と云う意味のフォンフィールを付けた家名を持つ事が許される。コレは体売るだけで士爵よりも稼げるからだと言われている。

「侯爵家シークウエスの者です。此度は二の娼姫にお会いしたく参りました」

窓口に来たジジイはそんな娼姫の一人、アイリツシュ・リオルフオンフィールと面会したいと言う。

本来ならば話も聞かずに断れる物だ。なにせアイリツシュ一晚の価値は五千万ルルト。割と裕福な平民の生涯に稼ぐ金の五分の一と同等だ。

どう云う事かと男は首をかしげたが、ジジイは手紙を男に渡して読んでもらった。

曰く、今から大体十年前の事で侯爵家から話があると。娼婦としての仕事では無いと手紙に書かれていた。

窓口の男は軽くうなずくとジジイに金額が書かれたプレートを見せる。

「二の娼姫と言いますとリオルフォンフィールとなりますが、面会金はお持ちでしょうか？」

「こちらに」

そう言つてジジイは金貨がタンマリ入った布袋を窓口のカウンターに置いた。

カウンター越しに従業員の男は金を秤に乗せ、金額をはかっている。

美しく品のある、とても体を売つて金を稼ぐような女には見えな
いアイリツシュは、過去に王の側室にならないかと声を掛けられた
事がある程の美女だった。

彼女が仕事を休んだのは一度、大凡十年前の十月十日のみだ。

窓口に来ていたジジイ……シークウェス家の先代執事であるオデ
イロツトはその過去を洗い、趣向記録用のメモリージュに写された
アイリツシュ・リオルフォンフィールと女の子の外見を当てはめて
確信した。

この娼姫こそが、今シークウェス家で保護している女の子の母親だ
と。

春売りの女が子供を産む事を許されるのは、父親の顔が良く、確
実に父親が解る場合のみだ。しかしこの娼館に来る男は身分が高い
者が多い。故にその情報は秘匿とされ、国家の持つスパイでさえ知
る事は出来ない。もしかしたら王の御落胤かもしれないのだ。間違
つても情報を外に出す事は無い。

それ故父親は解らないまま産まれた子供は未来性を買われる。そ
の未来性の変わりに娼婦は十月十日前後の休みが与えられ、わずか
な休息と高い栄養価のある食事が出される。

今から九年と少し前、アイリツシュは一人の女兒を産んだ。オデ
イロツトは父親を探る事は出来なかったが、アイリツシュが子を産
んだ時にこの街は竜と交戦していた事実を思い出した。

そして更に探つて行ったら、この娼館から産まれたばかりの女兒が
竜と共鳴する魔法陣で飛ばされ行方不明になったと言う事実をつか

んだ。

「確かにお代金頂きました。では予定日をお書き願えますか？」

そう言つて男はスケジュール帳のような紙と書き込むためのペンを差し出した。

娼婦ともなれば月の半分くらいは休みらしい。体調に気を使われているためだ。その為割と早くの日にちをとる事が出来た。

娼婦の仕事をしてもらう訳ではないので、若干日が詰まっても大丈夫だからだ。

予約が終わつた後にオディロットは懷からもう一つの手紙を取り出し、追加金の金貨を数枚窓口の男に差し出した。

「当家の主が話すものがどう云う内容か、大まかに書かれた手紙です。どうかアイリッシュ殿に渡して頂きたい」

本来、娼婦に手紙を渡す場合、店側が中の内容を確認している。しかしこうやって個人の従業員に金を渡した場合、中を見られる事無く娼婦に手紙が届く。

万が一を考えて、中を見られても差し支えないようにはしてあるが、なるべく早く届くようにと受付の男に頼んだ。

思わぬチップを貰った男は上機嫌で頷き、オディロットを出口まで送つて行った。

十：まおうさま、お歌を習う。

オディロットが娼館で取引をしていた頃、オラクルが回復したりシューは兄のジュリオが留守だったため、兄付きの執事に断りを入れて女の子の部屋に向かっていた。

「ああリツア！ 一週間ぶりね！ まだ言葉を覚えていないみたいだけど、今日は一緒にお歌を歌いましょうね」

花が浮かぶような笑顔を向けて女の子に微笑んだリシューは軽量バックから大きめに書きだした単語帳や歌詞カードを取り出した。当代当主専属執事から話は聞いていたので、家具や鉱石がごろごろと転がっているのは無視だ。この女の子に常識を当てはめてはいけないと言っのは嫌と言っほど理解している。

さて遊びながらの勉強法だが、リシューは自分が喋る言葉に合わせて単語を見せる事にしたい。

感覚と云うか表情を読み取るのが巧いのか、女の子は言葉こそ喋らないものの此方の意に沿わぬ事は今のところしないでくれている。野生的な会話と云うのか、嫌な事があつたらまず威圧してくるので今のところ死傷者はゼロだ。

「ふふっ、トーンメモリージュを持ってきたので楽器が無くても音が出るのよ」

そう言いながらリシューは椅子に座り、録音専用のメモリージュを机の上に置き微量の魔力を籠めた。

流石に魔力には敏感な女の子は瞬時に警戒態勢をとったが、ポロンポロンとテンポよく流れてくる音色に興味が移り、リシューの膝

の上によじ登ってトーンメモリージユをツンツンとつついたりビクビクしながら持ち上げたりと大忙しだ。

リシユーはそんな様子を微笑ましく見守りながら、身体をゆらしリズムを加えつつ民謡を歌い始めた。

勿論リシユーの手には女の子に見えるように歌詞カードが握られている。リシユーが歌っている民謡はテオラロールの子供たちなら誰でも知っている自然に感謝を捧げる歌だ。

太陽の光に感謝して大地と水から命を貰い、死すべき時は夜の闇へ還ろうと言う、ある種の信仰のような昔からあるもの。

深く考えたら歌詞の中に恐ろしい所もあるが、子供たちはその意味を知らずに口ずさむ。

リシユーはもうこの童謡を随分と歌っていないが、やはり子供の頃に覚えた歌はスルリと喉を通り口から出る。

一度歌い終わって女の子を見るとアンコールと言いたいのか、トーンメモリージユにリシユーが注いだくらいの魔力を籠めていた。

「まあ、リツアはそんな所ばかりすぐ覚えちゃうんだから」

でも歌を求められるのに悪い気はしない。今でこそシークウエス家の分家となった子爵夫人なぞをしているリシユーだが、将来に夢を見る歳だった頃はほかの貴族の娘と同じく歌姫に憧れたものだ。歴史に名を残す吟遊詩人、八つ星の歌姫は本当に隣国の姫だったのだからテオラロールやその周辺の貴族の娘は幼いころ、男の子が勇者や英雄を目指すのと同じように歌姫になりたいがっていた。

そんな過去の記憶を思い出しながら、リシユーはアンコールに答えてもう一度歌い始めた。

「朝の日の出 輝く太陽 僕らを祝福してくれる」
「あっあー」

出だしを口に出した所で女の子もリズムカルに声を上げる。途端、幻想的な淡い光がリシユーと女の子の周りを囲み、曲と共に揺れたりまわったり。

女の子が上機嫌に手を振り、それに合わせて流れ星のように空間を駆ける光に見とれ、リシユーは自然と膝の上に居る女の子を抱きしめる。

「恵み育む 大地や大河 巡り巡る 命の糧を 頂き返す」

相変わらず表情は変わらないが、それでも楽しそうな雰囲気醸し出して肩を揺らす女の子を見て、リシユーは足でリズムを刻み女の子にさらなる楽しさを伝えた。

「遠い別れが来ようとも 僕らが還るは月の元 夜空に抱かれて 皆眠る」

歌い終わりメモリージュも止まった所でもう一度軽く女の子を抱きしめ、女の子に歌詞を見せた。

読みやすく丁寧に書かれている歌詞を見て、一音ずつ丁寧に教えていく。

普段「あ」と「う」しか使わない事や、食事をしなかった事もあって舌を使う事に慣れていない女の子は、どうやれば他の音が出るのかイマイチ理解していないようだった。

それでもリシユーは自分の口の中を触らせたりして音の出し方と意味を教えていく。

生憎とリシユーの迎えが来てしまったのでお開きになってしまっ

たが、熱心に紙をみる女の子を見てリシューは満足げになつた。これならばもう少ししたら三歳児程度には喋れるようになるだろう。軽く頬を撫でて手を振ったりリシューに、どう云う意味かは解っていないようだが女の子は手を振り返した。

それだけで来た時と同じように花が浮くような笑顔を見せて、ようやくリシューは別宅への帰路にたった。

十一：ジャンジャックと国王。

女の子がジュリオやリシューと親睦を深めている間、ジャンは父親のアルと共に王城へ都城していた。

理由は言わずもがな、八つ星以上の実力があると見える女の子の存在を世界に向けるためだ。

なぜ此処まで八つ星を危険視するのか。それは過去の八つ星の者達の常識を逸した強さが原因だ。魔法を極めた者は天候や災害を自由に操り周りに恐怖と平和を与えた。食を極めた者はただ食べる為だけに国を滅ぼした事もある。騎士は敬愛する王に仕えて大陸制覇をたった一人でやり遂げた。

ようは人には行けぬ場所に居るのだ。その上更に世界の加護があるなんて悪夢以外の何物でも無い。何故なら世界の加護を受けた者はこの世界にあるあらゆるモノから守られるからだ。

例え海に落ちても溺れる事は無く、水中にある酸素が勝手に頭を包み呼吸が出来る状態にされる。飛びたいなあと思えばマナを活用された風が吹きその場で空中散歩が出来るだろう。

それどころかこの土地を浮かせたい等と思ったら世界はそれを実行するのだ。

今のところ女の子に感情はあれど知識が無いのでその様な事態に陥る事は無いが、人間社会で夢を見つけてしまえば世界は全力でそれを応援するだろう。

そしてそれは世界のどこに影響が出るのか解らないのだ。

故に各国は、世界の加護を受けた者、または五つ星以上の者が現れた場合、どんな土地でもある程度の優遇を受けられるように発表する。

五つ星六つ星はまだ人間っぽい所があるだろうで済むが、七つ星は人外。八つ星は災害だ。

「ジャンジャック様、アールデリツヒ様。此方へ」

つらつらと考え事をしていたら、謁見の時間が来たらしく扉の前に立つ近衛兵が観音開きに戸を開けた。

「ジャンジャック・オールド・シークウェス殿ならびにアールデリツヒ・ル・オット・シークウェス殿が参着いたしました」

王に届くように到着の旨が伝えられると、ジャンとアルは堂々と謁見の間の真ん中を歩き王の前で膝をついた。

ジャンは五つ星の冒険者で国に着いている訳ではないので、敵意が無い事を示すために指を組み顔の前まで上げた。

「顔を上げる事を許可する」

王が一声掛けるとジャンは手を下げてから二人同時に顔を上げる。

「此度の謁見の目的は聞いておる。世界の加護を持つ者が現れたそうじゃない？」

「はっ、現在は我がシークウェス家で保護しております」

いささか緊張した面持ちでアルは声を上げた。侯爵家前当主とは云え、基本的に事を伝えるのは公爵家の人間に向けてだ。王族に声を掛けることなど片手に数えるほどしか無い。

世界の加護と云う単語にその場に居る者、特に近衛兵は顔を引き締めた。荒事を好むような人物であったならまず叶わないが王を守

らねばならないからだ。

「して、その者はどのような御仁じゃ」

例え帝王学を学び下の者に敬語を使う事の無い王とて例外は無い。八つ星以上に珍しい世界の加護を持つ者は、すなわち世界の頂点に立っているのと同じ意味だからだ。そこに国や平民貴族王族の差は無い。

しかし世界の加護を受ける事の出来る者は例外無く老人だった。天寿を全うする数年前に漸くその頂きに立てる。それが皆の常識だ。その点が今回の異例を際立たせる要因になっている。

「はっ、その方に関しては最初に保護した息子に弁を立てさせて頂きたく」

「許可する」

そこでジャンは冒険者としての立ち位置を示すために立膝をやめ、堂々と立ち上がり王に目を向けた。

「最初に一言申し上げたくば、今回保護した世界の加護を持つ者は子供です」

子供、と云った瞬間に周囲が思わずと云った様子でざわめいた。無理も無い事だ……。とジャンは軽く首を振り、混乱が収まるのを待った。

「続ける」

「ありがたく。後ほど証拠としてメモリージュをお渡ししますが、その子供にあったのは我らがテオラロールの誇る洞窟型ダンジョンの下層域に御座います。子供は人の言葉を理解しておらず、膨大な

魔力を持つて私とレイラインを繋ぎコミュニケーションをとっております。

見たことも無い術を使い私の体を癒した事や、その後の様子を見る限りダンジョンで育った事がうかがえます。また、教養教育の為に絵を描かせてみた所エンペラーホッグを召喚する紋章を描き入れたことから、紋章組合に登録させれば八つ星は確実かと見受けます」

そこまで云い切り一息ついたジャンは周りの様子を見回した。

ありえない事が連続で起こる事はここ数日でかなり慣れたが、周りの衝撃を見るに自分は真つ当だなあとさしあたり無い感想を覚えた。

「詳しくは纏めた報告書を読んでいただきたく存じます」

「その御仁は城に呼ぶべきか？」

もし城や王都に何かがあつたら困るところではないが、それでも最上級の持て成しをして機嫌を取らねばならない場合、王とは率先垂範する立場だ。

それによつて周りに多大なる疲労や苦勞を掛ける事になるが、国を守るために立たねばならぬ立場にある王は総てを考慮した上でジャンに問いかけた。

「あまり勧められません。常識が全く無く、今は我が姉が言葉を教えている段階です。王勢の人に驚いて攻撃、なんて事も考えられま

すので、時間を置くか少数で場所を移し会見した方がよろしいかと」

ジャンの言葉を聞き、王は軽くうなずいて手を叩いた。

「大凡の報告しかと受けた。これにて解散とする。冒険者ジャンジヤック及びシークウエス家に褒美を取らせ、今後の会見に役立つよう動いてもらいたい」

「はっ、有り難きお言葉」

手を叩いて周りに合図を送った瞬間に謁見の間に居る人は一斉に仕事を始めた。それと同時に今まで膝をついていたアルもジャンと同じように立ち上がり王に目を向ける。

「細かい事を聞くために幾度か使者を送ろう。宰相は会談場所及び必要な人員確保を命ずる。文官長は世界各国に向けて大凡八つ星と思われる世界の加護を受けた子供が現れたと大至急書簡を出せ！」

目線を受けて頷いた宰相と文官長だと思われる男達は礼をした後に颯爽と謁見の間を出た。それを見届けてジャンとアルにもう一度労りの言葉を掛けて、一息ついた。

総ての言葉を聞き届けた二人は最上の礼をして謁見の間から退場した。

後は舞台が整うのを待つばかりである。

十二：まおつさま、出迎える。

家に帰って来たジャンは家人達への挨拶もそこに女の子の部屋へ向かった。

途中で姉付きのメイドであるライハイマーに会ったので、自分が居ない間に女の子がどのような事をしていたかについて軽く会話をした後に軽い足取りで廊下を歩いて行った。

女の子に大勢の人間を見せるためにハイトーンメモリージュ、映像と音を同時に記録出来るメモリージュを国家中枢から預かったためだ。

預かった映像は市井の様子や軍事訓練映像、国を上げての祭りや劇など一貫性が無い。女の子がどのような物を好むか解らなかったし、知識を与えて損は無いと言う判断の元だ。

「リツア、入るぞ」

そう言つてノックもせずジャンは勢いよく扉を開けた。

元々気配に敏くジャンに至ってはレイラインが繋がっているため女の子はジャンが屋敷に到着した時から此方に向かっているのは理解していた。

そのため「おかえり」と云うように扉の前で待機していた女の子は、勢いよく頭をぶつけた。

「すつ、すまん。大丈夫か？」

「うー」

勿論扉が開くのは理解していたが、ぶつかってくると言う経験が無かった女の子は初めての事に驚き、ぶるぶると頭を振って声を上

げた。

途端頭の周りに淡い光が舞い、うつすらと赤くなったおでこを治癒
していった。

「あー」

光が舞い落ちたあと、もう一度ジャンに向かって女の子は声を上
げた。

お帰り。お帰り。遊ぶ？ お歌！

女の子が姉に歌を習っていたのは先に出会ったライハイマーから
聞いていたので、ぽんぽんと頭を撫でながら優しい目をして女の子
を抱き上げた。

「帰って来た時は『おかえり』と云うんだ。お　か　え　り。云っ
てごらん？」

喋る。喋る。繰り返す。音。

簡単な単語を選んでレイラインに乗せながら、ジャンは日常生活
の単語を女の子に仕込んでいった。

「う　う　あ　い」

「お　か　え　り、だ。凄いじゃないか、『い』の音が増えたぞ！
」

結局お帰りと云わせる事は出来なかったが、その後も色々であつ
てシークウェス家ではその日、女の子の語録が増えた事による御目
出たパーティとしてディナーが若干豪華になった。

そして女の子は音の出し方を覚えるとご飯が多くなると云う誤った認識をする羽目になるのはほんの少し後の話。

十三：まおうさま、短文を話す。

女の子のお出迎えを受けたジャンは報告に受けていた部屋のあり様を見て軽いため息を吐いた。

「リツア、お前は本当に非常識の塊だなー」

レイラインで繋がっているので、誰よりも的確に女の子と会話が出来のの良い事にジャンは他の者より多く言葉を掛けるように心がけていた。

「うっういい？」

心で繋がる言葉とジャンの発した音を重ねて、ひじょうしき？と聞き返しただろう女の子に「ひじょうしき、な」と訂正を入れ、ジャンは部屋をぐるりと見回した。

増えた家具にごろごろと、二十や三十はくだらないと思われる拳大の原石たち。最初はアイオライトだけだったが今は赤に黄色に緑にと種類が増えている。

もしもこの原石たちを然るべき所で売り払えば数年は遊んで暮らせるだろう。質も大きさも逸品だ。

「まあ良いか。王からハイトーンメモリージュをお借りしたから今日から一緒に観賞会しような」

「うー！」

解った！と心で訴えて来た女の子に向かって「か・ん・しょ・う・か・い。言ってみようなー」と言葉を続けながらなけなしの魔力をハイトーンメモリージュに籠める。

普通のメモリージュやトーンメモリージュなどの映像や音に特化した物ならばジャンも意識せずに使えるが、二種以上を掛けあわせるマジックアイテム、この場合は映像と音を同時に扱うハイトーンメモリージュ等は存外魔力を喰う。

元の魔力が少ないジャンにとってはあまり歓迎したくないアイテムだ。

そんな事をしながらまず最初に見せたのは貴族の子供に見せるようなおとぎ話の劇だ。

数代前の隣国、アースライドの歌姫と勇者の冒険だ。八つ星の吟遊詩人の歌を聴けばたちまち傷は癒え、体力等が向上し農民の子でも一軍に突っ込めるようになるという、最強の援護姫。後に援護姫だと語呂が悪いと本人が訴えたため、歌姫と名を変えた姫君の話だ。

とりあえず魔力を籠め終わったジャンは女の子を抱き上げ、元からあったのが増えたのか解らないソファに腰掛けた。

膝の上に女の子を乗せ、立体映像のように出て来た逆円錐の光で出来た映像を眺める。

最初こそ驚いていた女の子だが、ジャンが害は無いと伝えると興味深そうに映像を眺めていた。

「どうせだから言葉でも覚えような。アレにレイライン見たいな魔法掛けれるか？」

出来れば万々歳だ。と云う風に伝えてみれば、女の子は少し唸った後に「うああー」と抑揚のない声でハイトーンメモリージュに青白い光の波を送った。

レイラインで何？ と聞いてみれば、覗く。と返って来た。他人の思考を覗く呪文だろうか、ジャンの中ではピープと呼ばれるだろう魔法に近い。

どうやらピープで音と映像を解析し、舌の動きから読み取ったらしく慣れない動きに翻弄されながらも喋り方のコツをつかんだらしい。

とてつもない衝撃に襲われながらジャンは「本当に非常識の塊だなあ」と呟いて女の子の頭を撫でた。

十四：まおうさま、お出かけする。

女の子がその後もハイトーンメモリージユを繰り返して見て日々を過ごして行くうちに、母親であるアイリツシュ・リオルフォンフィールに会いに行く日となった。

娼婦であるアイリツシュを侯爵家であるシークウェスに客人として招く事が出来なかったため、国の要人たちが泊まるような館を一日貸し切ったの御対面となる。

本来ならば公爵家や王族が使う場所であるために、シークウェス家の者は皆内心ヒヤヒヤとしている。公爵と侯爵、身分差で見れば一つ違いだがそこには大きな壁がある。

王族を中心として四つに分かれる四公爵。四公爵の下に連なる六十四の侯爵家。侯爵の下である伯爵や男爵などは頻繁に入れ替わりや増減があるので正確な数は中枢以外把握していないが、四公爵家と六十四侯爵家だけは一定だ。

四公爵より上と云うと小国を預かった大公以外に無い。

シークウェス家とて六十四侯爵の中で大きさとしては上位に位置するが、侯爵として纏められると他の家と平等だ。

そんな侯爵家の人間ですら書類一枚で館を借りる事が出来たのはひとえに『世界の加護』を持つ女の子を保護しているからにすぎない。おまけに今回掛る費用は総て中枢持ちだ。シークウェス家の人間は改めて『世界の加護』を持つ人間の凄さを思い知った。

しかしそんな事は意に反さず、女の子は初めて乗る馬車に興奮気味だ。何かあってからでは遅いと、同乗者はジャンだけである。御者も必要無いようにと、わざわざモンスター……人の手が入った魔獣種の馬に引かせている。

この馬とも女の子はリンクで知識交換し、どんどんモンスターや訓練された動物の思考に近づいて行っている事を知っているのはジャンだけだ。

そんなジャンは馬車の中でひたすら女の子に人としての知識を与えていた。

「人に手綱なんぞつけん！ 待ても伏せも無しだ！ 初めて会う人には『はじめまして』だ」
「ぶー」

今から会いに行くのが産みの親なので一度は会っているはずだが、それでも約十年、離れていた女の子にとっては初めましてで良いだろう。

自分の親と云う存在について考えた事も無かったのか、キョトンとしながらもワクワクした様子の女の子にひたすら挨拶を覚えさせる。

それもこれも国王および中枢からお借りしたハイトーンメモリージユに問題があった。色々見せた結果、一番気に入ったのが軍事訓練映像だったのだ。しかも気に入った役柄は鬼隊長と名高い人物だったため、漸う喋れるようになった単語の殆どは『女の子』が使うには相応しく無い物ばかりだ。

子供はスラングを覚えやすいと言ったものだが、なまじ顔が整っている上に無表情、つまり本気で言っているように見えるので心臓に悪かった。

「とりあえず、物を壊したりモンスターを呼ぶのは禁止だぞ……」
「し、りゃ、にええ、にゃ！」
「リツァー！！」

それが例えつつかえつつかえて「さしすせそ」や「なにぬねの」
が上手く云えずに『知らねえな』が『しりやにええにや』になろう
とも。

平時ならばかわいらしいで済むがこれから会うのは産みの親だし、
女の子が大勢の人に慣れた後は国王との御対面が待っている。

美しい言葉とまでは行かなくても、年頃の子供のような言葉使い
を覚えさせるためにジャンはキリキリと痛む胃を抑えながら『正しい
言葉講座』を馬車の中で延々と続ける羽目になった。

十五：まおうさま、到着する。

アイリツシュ・リオルフオンフィールはその日、遊女として王族を相手にした時以上の緊張をもつてそわそわとして居た。

それと云うのも今から十年ほど前、魔法陣が唐突に現れて消え去ってしまった自身の腹を痛めて産んだ子供が帰って来たとの連絡を受けたからだ。

本来はシークウエス家と云う、身分だけならば雲の上の人物とのやりとりの予定であつたらしいが、我が子はなんと世界の加護を受けているらしく、実力も八つ星相当だと言う。

そのおかげか普段は決してみる事の出来ない中枢の要人達に囲まれて、酷く場違いである居心地と、それだけ注目を集めている我が子との対面に表情には出さないものの酷く困憊している。

しかし今日のメインイベントは自分と我が子の対面だ。

国の要人や貴族達が揃う場所に居るのはやはり場違いな印象が強いが、一対一ならば何度も経験がある。それ故にアイリツシュは仕事さながらの気配りをしながら気丈に振舞って見せた。

「ジャンジャック・オールド・シークウエス殿ならびに保護された少女が到着いたしました。只今パーティーホールに向かつております！」

伝令役の兵士が小走りで部屋に入り、部屋の中に居た者達に今日の主役到着の旨を伝えた。

今回の会合は、女の子がどのような人なりであるかを王に報告する目的もあり、到着したと同時にコンパクト・スクリーンと呼ばれるテレビの生放送のような魔法が部屋中で展開される。

その為女の子に馬車の中で魔力があっても攻撃しないようにとジヤンが言い聞かせていた。知らせずについてヘタに警戒されたら総てがおじゃんになるので女の子以外はヒヤヒヤしているのが現状だ。

そうこうしているうちに足音が二つ、扉に近い者に聞こえるくらいまでになった。

「五つ星冒険者ジャンジャック、リツアを連れてまいりました」

「まいいました」

子供で云うまねっこ期に突入している女の子は、なんとなく解るニュアンスの言葉をあまりまわらない舌で真似る。

そんな女の子に若干癒されながら、秘密裏に進められている会合が幕を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0286u/>

まおうさま、ひとになる。

2011年9月5日00時59分発行